# 乳幼児精神発達検査にみられる
# 両親評定と教師評定の差異について（II）

進　野　智　子

長崎大学教育学部
附属幼稚園　竹　内　チカ子

〃　宮　川　芳　子*

# A Study of the Discrepancies in the Evaluations of a Developmental Test by Parents and Teachers (II)

Tomoko SHINNO

Chikako TAKEUCHI

Yoshiko MIYAGAWA

## 目　的

先の報告（進野ら，1979）において，精神発達の程度が各分野毎に明らかにされる乳幼児精神発達検査を使用して，3歳児を対象に入園時における幼児の精神発達について幼児の両親と2名の教師による評定を実施した。その結果，常に両親が教師よりも高い評定をするとは限らないこと，教師間の評定には，男・女児群の運動分野，女児群の社会分野に高い相関がみられたこと，三者による評定は全児の運動分野において有意な一致がみられたことが明らかにされた。本研究は，前報から6ケ月経過した幼児の精神発達の評定を前報と同一の評定者によって行い，評定者間にどのような差異がみられるかを検討する。また，被験児が，長子と非長子・男児と女児では評定はどのように異なるか，これらの検討を目的に本研究を進める。

＊現，長崎市立東長崎中学校

## 手続・方法

被験児：前報と同一の幼児で，３歳児15名。被験児は前報と同様の方法で，全児，長子群・非長子群，男児群・女児群に分類した。

評定者および評定時間：前報と同一の評定者である。親による評定は，前報から約６ケ月以内に行なったものであり，教師による評定は入園後約６ケ月経過した頃に行なわれた。各評定者の評定時における被験児の生活年令と男女の構成比は表１に示す通りである。親

表１　被験児の生活年齢および男女の構成比

（月）

| 評定者／生活年齢／被験児 | 両親 | | 教師L | | 教師X | | 被験児の |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平均 | 標準偏差 | 平均 | 標準偏差 | 平均 | 標準偏差 | 男女比 |
| 全児 | 49.50 | 3.63 | 49.60 | 3.70 | 49.60 | 3.62 | 8：7 |
| 長子群 | 50.00 | 4.37 | 50.10 | 4.45 | 50.20 | 4.34 | 4：5 |
| 非長子群 | 48.80 | 1.86 | 48.80 | 1.86 | 48.80 | 1.86 | 4：2 |
| 男児群 | 49.70 | 3.48 | 49.90 | 3.68 | 49.90 | 3.68 | 8：0 |
| 女子群 | 49.10 | 3.52 | 49.30 | 3.69 | 49.30 | 3.70 | 0：7 |

による評定に際しては，前報と同一の親に評定してもらった。親・教師L・教師Xの年令は，前報より約６ケ月経過している。教師Xは，７月からは継続して三歳児クラスの保育にあたった。

質問紙：前報と同一の津守ら（1965）による「乳幼児精神発達質問紙（３～７歳まで）」を使用した。

結果の整理：前報と同一の方法である。

## 結　　果

### １）全児の比較

表２　全児・長子群・非長子群の発達指数

| 分野／評定者／被験児 | 運動 | | | 探索 | | | 社会 | | | 生活習慣 | | | 言語 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | P | L | X | P | L | X | P | L | X | P | L | X | P | L | X |
| 全児 | 146.08 | 141.85 | 149.84 | 123.68 | 72.71 | 96.26 | 130.65 | 74.53 | 111.23 | 145.43 | 84.91 | 109.42 | 131.76 | 79.24 | 117.78 |
| | 17.24 | 15.73 | 12.19 | 15.43 | 13.37 | 11.96 | 15.88 | 8.19 | 10.02 | 21.96 | 15.41 | 13.54 | 11.09 | 13.82 | 9.66 |
| 長子群 | 146.30 | 141.63 | 148.40 | 120.90 | 73.68 | 96.06 | 129.81 | 74.35 | 110.90 | 144.16 | 90.78 | 106.74 | 134.60 | 81.95 | 117.75 |
| | 14.29 | 16.10 | 13.53 | 16.51 | 16.49 | 12.73 | 11.00 | 7.87 | 12.45 | 23.44 | 16.33 | 14.90 | 11.14 | 17.05 | 11.42 |
| 非長子群 | 145.75 | 141 85 | 149.84 | 127.84 | 71.27 | 96.56 | 131.91 | 74.90 | 111.71 | 147.34 | 76.11 | 113.46 | 127.49 | 75.17 | 117.83 |
| | 20.90 | 15.73 | 12.19 | 12.55 | 5.92 | 10.70 | 21.12 | 8.64 | 4.29 | 19.38 | 8.03 | 9.89 | 9.53 | 3.67 | 6.14 |

各分野毎の各評定者による発達指数は，表2に示す通りである。表2の上欄は，発達指数の平均値を，下欄は標準偏差を示す。また表2において，評定者欄のPは親を示し，Lは教師Lを，Xは教師Xを表わす（P，LおよびXに関しては以下同じ）。同一の幼児についての三者による評定の一致度は，表3に示す通りである。一致度はケンドールの一致係

表3　全児・長子群・非長子群の評定の一致係数

| 被験児＼分野 | 運動 | 探索 | 社会 | 生活習慣 | 言語 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全児 | 0.18 | 0.47 | 0.69 | 0.45 | 0.64 |
| 長子群 | 0.83*** | 0.36 | 0.74* | 0.59° | 0.75* |
| 非長子群 | 0.81** | 0.52 | 0.61 | 0.07 | 0.20 |

数によった。表中の**印，*印は有意差検定の結果，それぞれ1％，5％水準で有意であることを示し，°印は，10％水準で傾向のあることを示す（以下同じ）。各評定者間の相関係数は，スピアマンの順位相関によって求められた。その結果は，表4に示す通りである。

表4　全児・長子群・非長子群における評定者間の相関

| 被験児＼評定者＼分野 | 運動 | | | 探索 | | | 社会 | | | 生活習慣 | | | 言語 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | P−L | L−X | X−P | P−L | L−X | X−P | P−L | L−X | X−P | P−L | L−X | X−P | P−L | L−X | X−P |
| 全児 | 0.83** | 0.74** | 0.87** | 0.18 | 0.54* | −0.10 | 0.62* | 0.58* | 0.44 | 0.12 | 0.22 | 0.19 | 0 39 | 0.74** | 0.10 |
| 長子群 | 0.76* | 0.73* | 0.80** | −0.17 | 0.61* | −0 27 | 0.64* | 0.61* | 0.63* | 0.37 | 0.25 | 0.55 | 0.55 | 0.81** | 0.55 |
| 非長子群 | 0.81 | 0.61 | 0.81 | 0.84* | 0.01 | 0.03 | 0.71 | 0.43 | 0.31 | −0.27 | −0.21 | −0.66 | −0.04 | 0.33 | −0.83* |

運動の分野の評定においては，他の分野に比較して三者の評定に余り差はみられないが，教師Xが，他の二者よりも高い評定をしてい評定をしている。どの分野においても，三者の評定に有意な一致はみられなかった。

運動の分野では，各評定者間に1％以上の水準で有意な相関関係がみられ，2名の教師間においては，探索・社会・言語の分野にそれぞれ5％・1％水準で有意な相関がみられた。社会の分野においては，親と教師Lの間に5％水準で有意な相関がみられた。

### 2）長子群・非長子群の比較

三者の評定は，運動・社会の分野においては，長子群・非長子群の差はあまりみられない。しかし，両群の運動の分野において教師Xは，他の二者よりも高い評定をしている。探索の分野での親の評定は，長子群より非長子群の評定が高い。言語の分野に関しては，三者の評定は非長子群を長子群より高く評定している。生活習慣の分野に関しては，親・教師Xが長子群を高く評定しているが，有意差はみられなかった。教師Lにおいては，長子群を非長子群よりも高く評定する傾向が，どの分野においてもみられた。

三者の評定の一致に関しては，運動の分野において長子群に0.1%，非長子群に１%水準で有意な一致がみられた。社会・言語の分野においては，長子群に５%水準で評定の一致がみられた。生活習慣の分野での長子群に三者の評定の一致の傾向がみられた。

各評定者間の評定の相関に関しては，運動・社会の分野で長子群に５%水準で有意な相関がみられた。２名の教師間に，探索・言語の分野で長子群に５%水準で有意な相関がみられた。親と教師Ｌ間に，探索の分野で非長子群に５%水準で有意な相関がみられ，親と教師Ｘ間に言語の分野で非長子群に５%水準で有意な逆相関がみられた。

### ３）男女群・女児群の比較

各群の各評定者による発達指数は，表５に示す通りである。

表５　男児群・女児群の発達指数

| 分野 / 評定者 / 被験児 | 運動 | | | 探索 | | | 社会 | | | 生活習慣 | | | 言語 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | P | L | X | P | L | X | P | L | X | P | L | X | P | L | X |
| 男児群 | 142,70 | 135.00 | 150.37 | 125.03 | 70.74 | 93.09 | 129.50 | 74.10 | 108 21 | 156.52 | 83 04 | 113 88 | 127.06 | 74.84 | 116.62 |
| | 19.49 | 13.98 | 12 89 | 14.10 | 6.20 | 10.03 | 15.30 | 8.39 | 9.26 | 19.95 | 11.70 | 9.54 | 6.26 | 5.56 | 9.38 |
| 女児群 | 149.94 | 141.85 | 149.84 | 122.13 | 74.97 | 99.88 | 131.97 | 75.03 | 114.68 | 132.77 | 87.05 | 104.34 | 137.13 | 84.27 | 119.11 |
| | 13 22 | 15.73 | 12.19 | 16.69 | 18.15 | 12.93 | 16.41 | 7.94 | 9.74 | 16.67 | 18.54 | 15.49 | 12.83 | 18.06 | 9.81 |

言語・社会の分野において，三者は女児群を男児群より高く評定している。運動の分野では，両群とも新師Ｘの評定は他の二者よりも高く，教師Ｘを除いて女児群より男児群の評定が高い。探索の分野では，親は女児群より男児群を高く評定している。生活習慣の分野においては，教師Ｌを除いて女児群より男児群を高く評定している。そこでこの分野における性差と評定者の差について分散分析した結果，$F=102.9658$ ($df=2$ と39)で，１%水準で有意な交互作用がみられ，性差については，$F=3.7878$ ($df=1$ と39) で５%水準で，評定者については，$F=47.6751$ ($df=2$ と39) で１%水準で有意差がみられた。これらの結果に基き，各評定者の評定についてＴ検定をしたところ，親の評定について $t=2.2423$ ($df=13$) で5%水準で女児群の方を有意に高く評定していた。さらに言語分野において，性差と評定者間について分散分析した結果，性差について $F=4.9020$ ($df=1$ と39)で，評定者間について $F=37.8757$ ($df=2$ と39) で１%水準で有意差がみられた。この結果，各評定者の評定についてＴ検定したところ，両群の親の評定に10%水準で有意な傾向がみられた。

表６　男児群・女児群の評定の一致係数

| 性別 / 分野 | 運動 | 探索 | 社会 | 生活習慣 | 言語 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男児群 | 0.83* | 0.68° | 0.72* | 0.38 | 0.39 |
| 女児群 | 0.95* | 0.33 | 0.67* | 0.61 | 0.06** |

三者の評定の一致度に関しては，表6に示す通りである。三者の評定は，男・女児群とも運動・社会の分野で評定の一致が，5％水準でみられた。言語の分野で，女児群において5％以上の水準で有意差がみられ，探索の分野では男児群に，生活習慣の分野では女児群に，それぞれ評定の一致の傾向が10％水準でみられた。

各評定者間の順位相関に関しては，表7に示す通りである。

表7　男児群・女子群における評定者間の相関

| 分野／評定者／被験児 | 運動 | | | 探索 | | | 社会 | | | 生活習慣 | | | 言語 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | P | L | X | P | L | X | P | L | X | P | L | X | P | L | X |
| 男児群 | 0.77* | 0.71* | 0.74* | 0.55 | 0.43 | 0.63 | 0.32 | 0.47 | 0 52 | −0.20 | 0.78* | −0.36 | −0 20 | 0.72* | −0.24 |
| 女児群 | 0.99** | 0.89** | 0.94** | −0.21 | 0.78* | −0.51 | 0.64 | 0.64 | 0 32 | 0.64 | 0.03 | 0.63 | 0 68 | 0.79* | 0.32 |

運動の分野において，三者間の評定に有意な相関関係がみられた。2人の教師間の評定は，探索の分野では女児群に，生活習慣の分野では男児群に，言語の分野においては男・女児群に，それぞれ5％水準で相関がみられた。

## 考　　察

本研究は，親には前報より6ケ月以内に，教師は6ケ月経過した時点で評定を求めて行なわれた。親はこの評定をするまでに教師との間に個人面接が1回，クラス育友会が3回の計4回の面接の機会と，各個人による随時の相談が数回もたれている。前報では，親の評定は園での子どもの状態を見る機会が非常に少ない状態でなされたが，本研究における評定は各分野における園での子どもの状態を多く観察した結果なされたものである。教師Xも，今回は三歳児の保育に継続してあたっている状況のもとで評定した。

前報に比較すると，かなり三者の間に評定の一致がみられるようになった。ことに運動の分野において，三者間に高い相関がみられたのは，園がひき続き健康領域の研究に取り組んできたことによると考えられる。また言語の分野においても，三者間に評定の一致がみられるようになったが，これは父兄が言語に関する研究に取り組んできたため，子どもの評定に際して客観的資料を得ることにより三者の判断基準が，非常に似通ったものになったことが考えられる。

以下，考察を結果の分類に従って進めていく。

運動の分野における評定者間の相関は，全男児・男女児群・長子群において5％ないし1％水準で有意な相関がみられた。非長子群においては，有意な相関はみられなかったが，その相関係数はいずれも高く，運動の分野における各評定者が非常に近いことが明らかにされた。これは運動の分野における行動が，観察しやすいことに関係していると思われる。同時に教師が，園の研究課題の遂行にあたって運動能力評価の尺度に基づいて度々評定をしたことが，教師間の相関を非常に高めたと考えられる。

表8は，各定評定者による運動分野におけるピアスンによる相関係数を示す。表8に

表8　運動分野における評定者間の相関（ピアスンによる）

| 被験児＼評定者 | P－L | L－X | X－P |
|---|---|---|---|
| 全　　児 | 0.84*** | 0.75*** | 0.73*** |
| 長　子　群 | 0.91*** | 0.78** | 0.90*** |
| 非長子群 | 0.81* | 0.72* | 0.60 |
| 男　児　群 | 0.82** | 0.84** | 0.67* |
| 女　児　群 | 0.97*** | 0.91** | 0.92*** |

おいては，非長子群の相関が高いことが明らかにされている。教師間の相関の高さは上述のような理由があげられる。また，親の評定に関しては，親は個人面接や父兄参観の機会を通して，子どもの実態について直接観察することができたので，教師に近い評定をしたと考えられる。しかし，表3に明らかにされるように，全児の運動の分野の評定に三者間に有意な一致がみられなかった。これは，表3のケンドールの一致係数は順序尺度に基づいて求められ，表8のピアスンの相関係数は発達指数に基づいた序数尺度によって得られたものであり，三者の評定の範囲が非常に狭くなり，しかもその評定の順位が三者によって異なったためと考えられる。

表9は，本検査施行時における精神発達の各分野についての親の関心度を示すものである。調査は，アンケート形式によって親の最も関心のある分野から順位づけをしたものである。

表9　本検査施行時における精神発達の各分野についての親の関心度

（　）は標準偏差

| 被験児＼分野 | 運　動 | 探　索 | 社　会 | 生活習慣 | 言　語 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全　　児 | 3.00(1.49) | 2.93(1.44) | 2.06(1.10) | 3.53(1.56) | 3.46(1.28) |
| 長　子　群 | 2.55(1.25) | 2.77(1.31) | 1.88(0.87) | 3.77(1.22) | 4.00(1.15) |
| 非長子群 | 3.66(1.37) | 3.16(1.34) | 2.33(1.24) | 3.16(1.67) | 2.66(0.94) |
| 男　児　群 | 2,87(1.26) | 3.37(1.31) | 2.00(1.11) | 3.50(1.58) | 3.25(1.19) |
| 女　児　群 | 3.14(1.55) | 2.42(1.17) | 2.14(0.99) | 3.57(1.29) | 3.71(1.27) |

社会の分野において，三者間の評定には長子群，男・女児群に5％水準で有意な一致がみられた。表9より，親は社会の分野に一番強い関心をもっていることが明らかにされている。これは常々教師が，幼稚園の集団生活を初めて経験する幼児の親に，友人と関わり合えるように社会の分野に関心をもつように言及してきたことが，影響していると思われる。その結果が，このような有意な評定の一致として表われてきたのであろう。

生活習慣の分野においては，逆相関がみられたり，評定者間の相関が低かったりするこ

とが明らかにされたが，この分野の質問項目に関しては，前報においても記述したように教師にとって非常に評定しにくい項目が多く，Cronbach (1945, 1950) のいう推量傾向が働いたと考えられる。

評定に関しては，入園後8ケ月を経た時期では，長子群・非長子群の差，男児群・女児群の差というものは，言語の分野を除いて非常に少なくなっていることが明らかにされている。これは，教師はもちろんとして，親の側にも自分の子どもを評定する際，出生順位とか男女別による親の期待による評定がなくなり，客観化してきたものと思われる。

言語の分野に関しては，長子群の方が非長子群よりも，また女児群の方が男児群の方よりも高く評定されている。さらに，長子群・女児群において，三者の評定が有意に一致していることが明らかにされた。長子群・非長子群の構成をみると，それぞれの男女比は，長子群は4対5，非長子群は4対2となっており，長子群の高い評定は，この群に三者によって高い評定がなされていた女児が多くいることからも説明されよう。

前述した運動の分野における三者間の評定の高い相関の他にも，他の探索・社会・言語分野において，2名の教師間に有意な相関が多くみられる。これは2名の教師の評定そのものに高低はあっても，子どもの発達程度に関しての順位づけは，ほぼ一致していることを示すものである。同一の子どもを，半年間の教育経験を通して判断する基準が，接近してきた結果によるといえるであろう。

言語の分野において，非長子群を除いて2名の教師間に有意な相関がみられた。これは入園後約2ケ月半経過したころ園の父母が，伝言活動を主とした言語領域での研究課題に着手したことと多い関係があると思われる。この結果2名の教師はこの活動を通して，幼児の言語能力を客観的に把握できる機会をもったことによると考えられる。

## 要　　約

15名の三歳児について，前報告から半年を経過した時点で，同一の幼児に親と2名の教師によって津守式乳児精神発達検査を実施した。その結果以下のことが明らかにされた。

1．幼児の精神発達に関して，親が常に教師よりも高い評定をするとは限らないことが運動の分野において明らかにされた。
2．運動の分野においては，三者の評定には有意な相関がみられた。これは運動が把握しやすい分野であること，および園の研究課題が運動の分野であったことによると示唆される。
3．評定に高低の差はあれ，2名の教師の評定に有意な相関が多くみられ，子どもの評定の順位づけがかなり一致していることが明らかにされた。
4．親の関心の強い分野ほど，教師と親との評定が一致してくる傾向がみられた。
5．生活習慣の分野において，他の分野よりも相関が低かったのは，教師にとって非常に評定しにくい項目が多く，推量傾向が働いたことが示唆される。
6．入園後半年を経過すると，親や2名の教師の評定には，被験児群による差が減少することが明らかにされた。
7．言語分野におけるように，男児・女児の発達の違いがはっきりと表われているものもある。

## 引　用　文　献

Cronbach, L.：Further evidence on response sets test design. *Educ. Psychol. Measmt.*, 1950, 10, 3－31
「心理検査における反応の心理」岩脇三良　日本文化科学社，1973より引用.
――――：Response sets and test validity. *Educ. Psychol. Measmt.*, 1946, 6, 475－494.
前掲書より引用.
進野智子・竹内チカ子・宮川芳子：乳幼児精神発達検査にみられる両親評定と教師評定の差異について（Ⅰ），長崎大学教育学部教育科学研究報告，1979.
津守真・磯部景子：乳幼児精神発達診断法，3歳～7歳まで，大日本図書，1977.

（昭和54年10月31日受理）